

北社会ニュース 第25号

2006年7月19日

発行者： 鈴木壮夫

旧制第二高等学校の校友会、尚志会会歌に、次の一節があるそうです。

「名かあらず。黄金（こがね）かあらず。我党の尚（たうと）ぶ
ところ、何かそは唯（ただ）志」

西澤潤一会長著「新学問のすすめ」の中の印象に残る文章でした。和賀井敏夫先輩の学士院受賞が報道された3月14日、私は不遜な表現になるかもしれませんが、日頃から尊敬し、目標とさせていただいているずうっと年長の「身内」の方のご受賞だと心から嬉しくなり、朝の仕事であるそば打ちを続けたこと思いだしております。当日、帰宅して青山史朗先輩が発行された「百年の逸材」の「超音波診断の創始者」をあらためて数回通読しました。その都度、身が引き締まりました。文中、明善寮時代旧制二高の自治の伝統を戦時下の締め付けから守るべく闘った体験が「尚志の教育」と共に、その後の人生にも研究生活にも大いに役立ったと記述されております。

本日の第244回北社会は青山先輩の多大なご尽力により、ここ数年間実現できなかった多数の大先輩のご出席をいただき誠にありがとうございます。和賀井先輩にはご受賞後、ご多忙にもかかわらずご講演の準備を周到に遂行いただき感謝申し上げます。

本日第244回北社会・予定時刻表

18時30分	開会（世話人） 講師紹介（青山史朗先輩）
18時40分－19時30分	和賀井敏夫氏（中42回）学士院賞ご受賞記念講演
19時30分－20時10分	ゲストの大先輩にスピーチをお願いします。
20時10分	和賀井先輩の榮譽をたたえ校歌斉唱（鬼世話人指揮）
20時20分頃	散会

来月以降の北社会開催予定

9月21日（木）渋谷正史氏（高15回）東京大学医科学研究所・教授
日本痛学会 「吉田富三賞」ご受賞記念

10月 休会 18日（水）東京同窓会（ホテルオークラ）にご参加下さい。

【訃報通知】

来月、講演をお願いしておりました桜井良之助氏（高11回）は16日早朝、肺炎を併発され急逝されました。石原都知事とCO-WORKされていた「オリンピック招致」を主題にご講演いただく予定でしたのに誠に残念です。同期生として口惜しい一言です。

モンゴル国訪問記

モンゴルの夏は美しい。天は碧く澄み、羽毛のような白雲が漂う。地は緑に蔽われ、絨毯を広げたほどに起伏する。はるかに遠い山並みの北側斜面までは、木立と言えほどのものもない。ところどころに白いゲル（円形テント）の塊が見え、馬や羊の群れが草を食む。こんな風景がウランバートルより西へ五百キロメートル、カラコルムを過ぎてでもなお続く。（堺屋太一氏「チンギス・ハンの世界」より）

6月24日より7月3日、九泊十日の日程にて初めてモンゴル国を訪問しました。冒頭から堺屋太一氏の文章を引用させていただきましたが、この風景が移動中、絶えることなくえんえんと厭きるほど続いた日々でした。今回の訪問の目的、私が見聞きしたこと、印象に残ったこと等を記します。興味ありましたら、モンゴルに思いを馳せて下さい。

「ホランの会」の一員として参加しました。ホランとは元気な野性の小馬のことで、モンゴルとの草の根交流の会です。10年前位に設立され、毎年数回、双方の子供達を数人ずつホームステイ等で引き受けて、小さな友好を果たしております。今回の参加者は11名で男性は私一人、女性の中にはほぼ毎年訪モされている方が数人おりました。高温多湿の日本と違い、首都ウランバートルはさわやかでした。最初の三日間で主目的である関係先への訪問を予定通り終了できました。日本大使館・市橋大使。約1時間、細部にわたってご説明いただいた。北東アジアで手を握り和える国はモンゴル国以外、他にはなかなか現われない。モンゴルは友好的であり、努力したい。自由市場経済移行が軌道に乗るには相当時間が必要。モンゴル国外務省・フルバートアジア局長。5年前まで駐日大使でもあり流暢な日本語で約30分間、率直に自国の現状をお話しいただいた。自由主義の国になりもう後戻りはできないが、自然環境の砂漠化、貧困、失業、人口減少、民主化約10年の功罪等々問題は山積している。今年チンギス・ハン建国800周年、良い意味での民族主義が育つことを願っているし、一人当たり約600ドルのGDPを10年後に1500-2000ドルを目標としている。日本の経済協力に感謝し期待している。又、会員が日本語教師を11年間続けている第54学校を訪問、校長先生始め日本語を習っている子供達と交流しました。たまたまこの学校の出身者の一人が横綱朝青龍で、玄関に在校当時のボイスカートの写真が飾ってありました。（何故か評判は良くないが）モンゴルの公立学校は日本の小・中・高の一貫教育で11年間。語学は5年生から英語が必修、7年生から第2外国語も加わる。子供達の日本語も聞き取れるし、漢字も含め字もよく知っている。さらに、学年毎、全員の試験点数が貼りだされていた。女性優位の成績は社会に出る時も当然続き、女性の社会進出は目覚ましいとのことでした。モンゴルの女性は姿勢がキレイでした。欧州の影響もあるのか豊かなムネの谷間を誇らしげに見せ、闊歩する女性もウランバートルにはおりました。背筋をピンとして歩いていました。さて、私が一番印象に残り、心を豊かにしてくれたのは「草原の静けさ」でした。六ヶ所のゲル・キャンプに七泊し、早起きして妻と小高い丘に昇りました。半径7-10KM、周囲20-30KMのゆるやかな起伏の草原、風が流れ、時折カッコーが鳴いてました。シーンとした「静けさ」。小さいけれど自分達は生きているんだと意識させられました。